

菊 地 ト キ さ ん

新得町元町在住

明治 33 年 7 月 15 日生 (86 才)



訪問者 金村 優 昭和 61 年 8 月 26 日

私の夫、庄蔵（昭和 50 年 4 月 26 日没）は、岩手県出身で、父親と長男は日露戦争の旅順攻略で共に戦死しましたので、母親は明治 42 年に夫を連れて、上幌内の東郷農場にいた叔父を頼って入植し農業を手伝っていたそうです。

その後、大正 5 年に夫が屈足の 22 号で独立して農業を営むことになり、その折に縁があって私と結婚しましたが、当時はまだ未墾地が多くあり、熊が出没して恐ろしかったことが忘れられません。それから大正 8 年には新得に移り高橋木工場で働きました。経営者は高橋長助さんでしたが工場は番外地にあり、後で経営者は田川さん、菊田さんと最後は藤崎さんでした。

翌年の大正 9 年に新得魚菜市場が開設されたので、大正 10 年に吉野さんのお世話で市場に参加することができました。夫は「リング」箱を担ぎ乾物品の行商を始め、そのうち店も借家で当初は「リング」箱 2 個を並べ乾物を置いた程度の店でした。それから夫と共に努力したかいもあって、余り派手ではないが堅実な経営が 10 年余り続けました。

その頃（大正 12 年）もと町役場の助役さんの佐藤唯雄さんの家あたりに新得座がありました（開設者は帯広の人と聞いたことがある？）その後、経営者が志賀嘉一郎さんになり、その頃の志賀さんは、木材業で柵屋もしていて、いつも職人を 10 数人を使っていた親方でした。ところが今まで街の中心であった村形通りが駅の附近にだんだん変わってきたので、志賀さんは佐幌川向いの駅にも近い、もとの新得座跡地を選び、当時としては大金であった 300 円を帯広の北日本無尽株式会社（十勝無尽会社と旭川の博愛無尽株式会社が合併し資本金 24 万をもち全道を舞台とした金融会社であった）から借金して昭和 6 年に華やかに開業したまでは良かったのですが、経営は早々から不振になり、多額の借金によるものと思いますが、当然の如く保証人にそのつけが回ってきました。数人の保証人中夫も一人でした。夫は商売の上で得意さんであったので止むなく引受けたのですが、夫は石橋をたたいて渡る方の人であり、不本意もこの上ないことであったと思いました。他の保証人には返済の能力がないとみられたのでしょうか、結局は正直で実直な夫が矢表に立たされる立場になりました。

それからは私の家の生活は大きく変わり、ひたすら借金を返すのに夫と二人で夢中でした。その日の売上げから、いくらでも現金を手にしたら、その都度返済に充てました。

息子の庄一さんや戦死した初男さんも会社の人吉田徳松さん家にいたのでいつも走られ、そのときによくもらったお菓子の味を思い出し忘れられないと語っていました。

また生活はますます苦しくなりました。時には脇清吉さんから借りてでも会社の借金はきちんと返すようにしました。税金の滞納で赤札を家財道具に貼られたのが記憶に残り忘れることができませんでした。借金の方は昭和8年の暮れ頃には返すことができましたが経営権が委譲されることになりました。夫としては自分の性格からしても、とても興業師としては向かないことは十分知っていたが、そのときの事情は外に持っていくようもなく万止むなく劇場の経営を行きがかり上やることになりました。

その当時、街にはもう一つ新盛座がありましたが間もなく廃館となりましたので、その後は街で唯一の娯楽施設として町内の皆さんにご利用を頂き努力してきたかいたがと思っています。

新得座は昭和30年までやっていましたが、建物も古くなっていたし、テレビの普及も急にはやってきましたので、帯広の高橋さん（金物卸商）に譲渡しましたが長い経営の中には、いろいろなことがありました。特に戦時下では夜間の灯火管制で明かりを洩らすことができないが、夏の熱いときは場内は、むし風呂のようでお客さんはどうしても窓を開けるので、その都度よく怒られたものです。また戦前、戦後を通じて一番苦労したのは、劇団や芝居浪曲等の役者さんの食糧の調達でした。そのため、いも、そば、豆類、えんばくや野菜類等何んでも作りました。昼は店をやりながら料理をし、夜は劇場と毎日忙しい日の連続でしたが、今にして思えば夢のようで、懐しい思い出となっています。

（※ トキお婆さんは庄一さんご夫妻と、お孫さん康雄さん夫妻に、ひ孫さん3人に囲まれ、とても元気で幸せそうでした）



昭和17、8年頃の新得座の観衆

金村 優 提供